

闇桜

樋口一葉

青空文庫

(上)

へだ 隔ては 中垣なかがきの 建仁寺けんんにんじに ゆづりて 汲くみかはす 庭井にはゐの水みづの 交まじはり
そこの 底そこきよく 深ふかく 軒端のきばに 咲さく 梅うめ 一木ひときに 両家りやうけの 春はるを 見みせて 薰かほりも
 わか 分わかち 合あふ 中村園田なかむらそのだと 呼よぶ 宿やどあり 園田そのだの 主人あるじは 一昨をととし年としな くなりて
さうぞく 相さうぞく続ぞくは 良りやう之の 助すけ 廿二にじふにの 若わか者もの 何なに 某がし 学がく 校かうの 通つう 学がく 生せいと か や 中な
かむら 村かむらの かたには 娘むすめ 只ただ 一ひと 人ひと 男子なんしも あり たれど 早さう 世せい して の 一ひと 粒つぶも
 の と て 寵ちやう 愛あい は い と 手て の うち の 玉たま か ざ し の 花はな に 吹ふ か ぬ 風かぜ ま づ
ねが い と ひ て 願ねが ふ は あ し 田鶴たづ の 齡よ な が ぐ れ と に や 千代ちよ と な づ け し 親おや
こころ 心こころ に ぞ 見み ゆ ら ん も の よ 梅せんだん 檀だん の 二葉ふたば 三ツ 四ツ より 行ゆく 末すゑ さ ぞ と

世よの人のほめものにせし姿すがたの花は雨はなさそふ弥生やよひの山やまほころび初そめ
 しつぼみに眺ながめそはりて盛さかりはいつとまつはの葉はごしの月つきいざよふ
 といふも可愛かあいらしき十六歳さいの高島田たかしまだにかくるやさしきなまこ絞しぼ
 りくれなるは園生そのふに植うゑてもかくれなきもの中なか村むらのお嬢ぢやうさんとあ
 らぬ人ひとにまでうはさゝるゝ美人びじんもうるさきものぞかしさても習しふく
 慣わんこそは可笑をかしけれ北風きたかぜの空そらにいかのぼりうならせて電でん信しん
 の柱はしちやま邪魔むかくさかりし昔むかしは我われも昔むかしと思おもへど良りやう之の助すけお千代ちよに向むかふ
 ときはありし舞ひな遊あそびの心こころあらたまらず改あらたまりし姿すがたかたちきにと
 めんとせねばとまりもせで良りやうさん千代ちいちゃんちやんと他た愛あいもなき談だん笑せふ
 に果はては引ひき出だす喧けん嘩くわの糸いとぐちもうきたま何なにしこに来こんお前まへさ
 様まこそそのいひじらけに見合みあさぬ顔かほも僅はつか二日ふつか目め昨日きのうは私わたしが悪わるる

かりし此この後ごはあやうの様やうな我わが儘まいひませぬ程ほどにおゆるし遊あそばしてよ
 とあどなくも詫わびられて流石さすがにをかしく解とけではあられぬ春はるの水みづ
 イヤ僕ぼくこそが結けつきよく局いもなり妹いもといふもの味あぢしらねどあらば斯かくま
 で愛あいらしきか笑顔えがほゆたかに袖そでひかへて良りさん昨ゆふべ夕うれは嬉ゆめしき夢ゆめを見
 たりお前まへ様さまが学がく校かうを卒そつ業げふなされて何なんといふお役やくか知しらず高た
 帽かぼう子うしり派つぱに黒くろぬりの馬車ばしやにのりて西せい洋やう館くわんへ入いり給たまふ所ところをと
 いふ夢ゆめは逆さか夢ゆめぞ馬車ばしやにでも曳ひかれはせぬかと大おほ笑ほすれば美うつく
 しき眉まゆひそめて気きになる事ことおつしやるよ今日けふの日にち曜えうは最も早う何ど処こ
 へもお出いで遊あそばすなど今いまの世よの教けう育いくうけた身みに似にあ合あしからぬ詞ことば
 も真しん実じつ大おほ事じに思おもへばなり此こ方なたに隔へだてなければ彼あ方ちに遠ゑん慮りもな
 くくれ竹たけのよのうきと云いふ事こと二ふた人たりが中なかには葉は末すゑにおく露つゆほども知し

らず笑わらふて暮くらす春はるの日ひもまだ風寒かぜむき二月半なかば梅うめ見て来こんと夕ゆふぐ暮れや摩利支天まりしてんの縁えん日に連つらぬる袖そでも温あたかげに。良りやうさんお約束やくそくのものわす忘れては否いやよ。ア、大丈夫だいじやうぶわ忘わすれやアしなしかひ併ししコーツなと何なんだツけねへ。あれだものを出でかけにもあの位くらゐ願がつておいたのに。さうくおぼえて居ゐる八百屋やをやお七からくりの機み関みが見みたいと云いつたんだツけ。アラ否いや嘘うそばつかり。それぢやア丹波たんばの国くにから生い捕とつた荒熊あらくまでございの方ほうか。何どうでもようございますよ妾わかしは最早もつかへ帰かへりますから。あやまつたく今いまのはみんな嘘うそ何どうして中村なかむらの令れい嬢ぢやう千代子ちよこ君くんとも云いはれる人ひとがそんな御注ちうもん文ぶんをなさらう筈はずがない良りやう之助のすけたしかに承うけたまはつて参まゐつたものは。ようございます何なにも入いりません。さう怒おこつてはこまる喧嘩けんくわしながら歩あるく行わうと往らい来いの

人が笑ふぢやアないか。だつてあなたが彼様なこと許かしおつし
 やるんだもの。夫だからあやまつたと云ふぢやないかサア多舌
 て居るうちに小間物屋のまへは通りこして仕舞つた。あらマア何
 しませうねへ未だ先にもありますか知ら。何だかぞんじませんた
 つた今何も入らないと云つた人は何処に。最早それはいひツこな
 しとゝめるも云ふも一筋道横町の方に植木は多しこちへと
 招けば走りよるぬり下駄の音カラコロリ琴ひく盲女は今の世の朝
 顔か露のひぬまのあはれく粟の水飴めしませとゆるく甘く
 いふ隣にあつ焼の塩せんべいかたきをむねとしたるもをかし。千
 代ちやん鳥渡見玉へ右から二番目のを。ハア彼の紅梅がいゝ事
 ねへと余念なく眺め入りし後より。中村さんと唐突に背中たゝ

かれてオヤと振り返れば束髪そくはつの一群何と見てかおむつましい
 ことゝ無遠慮ぶゑんりよの一言ごんたれが花の唇はななくちびるをもれし詞ことばか跡あとは同音どうおんの笑わら
 ひ声こゑ夜風よかせに残のこして走り行くはしを千代ちいちゃん彼あれは何なんだ学がく校かうの御朋おとも
 友ちか随ず分ぶん乱暴らんぼうな連中れんぢゆうだなアとあきれて見送みおくる良り之助やうのすけよ
 り低頭うつむくお千代ちよは赧はなじろ然じろめり

(中)

昨日きのふは何いづかた方やどに宿とどりつる心こころとてかはかなく動うごき初そめては中々なかく
 にえも止とまらずあやしや迷まよふぬば玉たまの闇色やみいろなき声こゑさへ身みにしみて
 思おもひ出いづるに身みもふるはれぬ其その人ひと恋こひしくなると共にともに恥はづかしくつゝ

ましく恐ろしくかく云はゞ笑はれんかく振舞はゞ厭はれんと仮かりそ
 初の返答さへはか／＼しくは云ひも得せずひねる畳の塵よりたぐみちり
 ぞ山ともつもる思ひの数々逢ひたし見たしなど陽はに云ひし昨きの
 のふこころあざのふこころあざの心は浅かりける我が心我と咎むればお隣とも云はず良りやうさま様
 とも云はず云はねばこそくるしけれ涙しなくばと云ひけんから衣ごろも
 胸のあたりの燃ゆべく覚えて夜はすがらに眠られず思に疲れてとおもひつか
 ろくくとすれば夢にも見ゆる其人の面影優しき手に背を撫でな
 つゝ何を思ひ給ふぞとさしのぞかれ君様ゆゑと口元まで現のうつつ
 をりこころを折の心ならひにいひも出でずしてうつむけば隠し給ふは隔てがまへだ
 し大方は見て知りぬ誰れゆゑの恋ぞうら山しと憎くや知らず顔がほ
 のかこち事余の人恋ふるほどならば思ひに身の瘦せもせじ御覽ぜごらん

よやとさし出す手を軽く押へてにこやかにさらば誰をと問はるゝ
 に答へんとすれば暁の鐘枕にひびきて覚むる外なき思ひ寐の夢鳥
 がねつらきはきぬ／＼の空のみかは惜しかりし名残に心地常な
 らず今朝は何とせしぞ顔色わろしと尋ぬる母はその事さらに知
 るべきならねど面赤むも心苦し昼は手ずさびの針仕事にみ
 だれその乱るゝ心縫ひとぐめて今は何事も思はじ思ひてなるべ
 き恋かあらぬか云ひ出して爪はじきされなん恥かしきには再び合
 す顔もあらじ妹と思せばこそ隔てもなく愛し給ふなれ終のよるべ
 と定めんにいかなる人をとか望み給ふらんそは又道理なり君様
 が妻と呼ばれん人姿は天が下の美を尽して糸竹文芸備はりた
 るをこそならべて見たしと我すら思ふに御自身は尚なるべし及ぶ

まじきこと打出うちだして年頃としごろの中なかうとくもならば何なにとせん夫それこそは
かな悲かなしかるべきを思おもふまじく他あだし心こころなく兄あにさま様したと親したしまんによも
にく憎にくみはし給たまはじよそながらも優やさしきお詞ことばきくばかりがせめてもぞ
 といさぎよく断念あきらめながら聞きかず顔がほの涙なみ頬ほにつたひて思案しあんのより
いと糸いとあとに戻もどりぬさりとは其そのおやさしきが恨うらみぞかし一ひたすら向
 につらからばさてもやまんを忘わすれぬは我身わがみの罪つみか人の咎とがか思おもへ
にくば憎にくきは君きみさま様さまなりお声聞こゑきくもいや御姿おすがた見るもいや見みれば聞きけ
まば増まさる思おもひによしなき胸むねをもこがすなる勿もつたい体たいなけれど何事なにごと
はらだまれお腹立はらだちて足踏あしづみふつになさらずは我われも更さらに参まゐるまじ願ねが
ひみづふもつらけれど火水ひみづほど中なかわろくならばなかくに心こころ安やすかる
けふべしよし今日けふよりはお目めにもかゝらじものもいはじお氣きに障さはらば

それが本望ぞとて膝につきつめし曲尺ゆるめると共に隣の声
ほんまう ひぎ ものさし
 を其の人と聞けば決心ゆらくとして今までは何を思ひつる身
そ ひと きき けつしん いま なに おも
 ぞ逢ひたしの心一途になりぬさりながら心は心の外に友もなく
あ こゝろちづ ころころ ほか とも
 良之助が目に映るもの何の色もあらず愛らしと思ふ外一点の
りやうのすけ め うつ なん いろ おも ほか てん
 ごりなければ我恋ふ人世にありとも知らず知らねば憂きを分ちも
わがこ ひとよ をとごころ たんぼく
 せず面白きこと面白げなる男心の淡泊なるにさしむか
おもしろ おもしろ
 ひては何事のいはるべき後世つれなく我身うらめしく春はい
なにごと はな いはるべき のちのよ わがみ はる
 づこそ花とも云はで垣根の若草おもひにもえぬ
はな いはるべき のちのよ わかくさ

(下)

千代ちやん今日は少し快い方かへと二枚折の屏風押し明けて
 枕もとへ坐る良之助に乱だせし姿恥かしく起きかへらんとつく
 て手もいたく瘦せたり。寝て居なくてはいけないなんの病中に
 しつれい失礼も何もあつたものぢやアないそれとも少し起きて見る気な
 ら僕に寄りかゝつて居るがいと抱き起せば居直つて。良さん学
 校が御試験中だと申すではございせんか。ア、左様。それに
 妾の処へばつかし来て居らしやつてよろしいんですか。そんな事
 まで気にするには及ばない病氣の為にわるいから。だつて何う
 もすみませせんもの。すむのすまないのとそんなこと気にするより
 一日も早く癒くなつて呉れるがいと。御親切に有難うござい
 ますですが今度は所詮癒るまいと思ひます。又馬鹿なことを云

ふよそんな弱い気だから病気がいつまでも癒りやアしない君が
 心細ひ事を云つて見たまへ御父さんやお母さんがどんなに心
 配するか知れませんが孝行な君にも似合はない。でも癒くなる
 筈がありませんものと果敢なげに云ひて打ちまもる睫に涙は溢れ
 たり馬鹿な事をと口には云へどむづかしかるべしとは十指のさす
 処あはれや一日ばかりの程に痩せも痩せたり片鬢あいらしか
 りし頬の肉いたく落ちて白きおもてはいとゞ透き通る程に散りか
 かる幾筋の黒髪緑は元の緑ながら油けもなきいたゞしきよ
 われ我ならぬ人見るとても誰かは腸断えざらん限りなき心のみだれ
 しのぶぐきこもん
 忍 艸 小紋のなへたる衣きて薄くれなるのしごき帯前に結びた
 る姿今幾日見らるべきものぞ年頃日頃片時はなるゝ間なく睦

み合ひし中になど底の心知れざりけん少なき胸に今日までの物
 思ひはそも幾何ぞ昨日の夕暮お福が涙ながら語るを聞けば
 熱つよき時はたえず我名を呼びたりとか病の元はお前様と云は
 るも道理なり知らざりし我恨めしくもらさぬ君も恨めしく今朝
 見舞ひしとき痩せてゆるびし指輪ぬき取りてこれ形見とも見給はゞ
 嬉しとて心細げに打ち笑みたる其心今少し早く知らば
 斯くまでには衰へさせじをと我罪恐ろしく打まもれば。良さん
 今朝の指輪はめて下さいましたかと云ふ声の細さよ答へは胸にせ
 まりて口にのぼらず無言にさし出す左の手を引き寄せてじつとば
 かり眺めしが妾と思つて下さいと云ひもあへずほろ／＼とこぼ
 す涙其まゝ枕に俯伏しぬ。千代ちゃんひどく不快でもなつたのか

い福ふくや薬くすりを飲のまして呉くれないか何どうした大たい変へん顔かほ色いろがわろくな
 つて来きたおばさん鳥ちよつと渡りやうのすけと良こゑ之おど助おどが声こゑに驚おどかさされて次つぎの間まに祈き
ねん念ねんをこらせし母はも水みづ初はつ穂つ取とりに流ながし元もとへ立たちしお福ふくも狼あはたゞしく狽ま敷ま枕まくらもと
くらもと元もとにあつまればお千代ちよと閉とぢたる目めを開ひらき。良りやうさんは。良りやうさ
 んはお前まへの枕まくらもと元もとにそら右みぎの方ほうにおいでなさるよ。阿母おつかさん良りやう
 さんにお歸かへりを願ねがつて下ください。何なぜ故ゆゑですか僕ぼくが居ゐては不ふ都つ合がふで
 すか工く居ゐてもわるひことはあるまい。福ふくやお前まへから良りやうさんにお歸か
 へりを願ねがつておくれ。貴あなた嬢なは何なにをおつしやいます今いままで彼あれ程ほどお
 待まち遊あそばしたのに又またそんなことを工くお心こゝろもち持もちがおわるひのなら
くすりお薬くすりをめしあがれ阿母おつかさまですか阿母おつかさまはうしろに。こゝに居ゐ
 るよお千代ちよや阿母おつかさんだよいゝかへ解わかつたかへお父とつさんもお呼よびま

を申したよサアしつかりして薬を一口おあがりエ胸がくるしい
 ア、さうだらう此マア汗を福やいそいでお医者様へお父さんそ
 こに立つて入らつしやらないで何うかしてやつて下ださい良さん
 ちよつとそてぬぐひなんりやうに失礼だがお歸へり遊ばし
 鳥渡其の手拭を何だと良さんに失礼だがお歸へり遊ばし
 ていたゞきたいとあゝさう申すよ良さんおきゝの通ですからとあ
 はれや母は身も狂するばかり娘は一語一語呼吸せまりて見るく
 かほいろあほゆつゆをこよひおもりやうのすけた
 顔色青み行くは露の玉の緒今宵はよもと思ふに良之助起つべ
 こころ
 き心はさらにもなければ臨終に迄も心づかひさせんことのを
 しくて屏風の外に二足ばかり糸より細き声に良さんと呼び止めら
 れて何ぞと振り返れば。お詫は明日。風もなき軒端の桜ほ
 ろくくとこぼれて夕やみの空鐘の音かなし

青空文庫情報

底本：「新日本古典文学大系 明治編 24 樋口一葉集」岩波書店

2001（平成13）年10月15日第1刷発行

初出：「武蔵野 第一編」

1892（明治25）年3月23日

※括弧付きのルビは校注者が加えたものです。

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2007年8月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

闇桜

樋口一葉

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>